

彦山 (広瀬淡窓)

彦山高處望氤氳 木末樓臺晴始分

日暮天壇人去盡 香煙散作數峰雲

解説 彦山の清高さを詠った詩。

彦山 高き処 望み 氤氳

語釈 ※彦山 英彦山は福岡県田川郡添田町と大分県中津市山国町にまたがる山。弥彦山(新潟県)・雪彦山(兵庫県)とともに日本、

木末の 楼台 晴れて 始めて 分かる

三彦山に数えられる。※望 仰ぎ見た眺め、眺望のこと。

※氤氳 山気がたちこめて霧にかすむこと。※木末 梢のこと。※楼台 英彦山神社の社殿。※晴 霧がはれること。

日暮れ 天壇 人 去り尽くし

※天壇 彦山の山頂、すなわち社殿をさす。※香煙 香を焚く煙。

※数峰雲 祭壇で焚く香の煙が漂い分散して、あたかもその三峰にかかる雲のように見えることをいう。

香煙は 散じて 数峰の 雲と 作る

通釈 朝まだき、彦山の山頂のあたりは山気がたちこめて、霧に

遮られてほんやりと霞んで、よく見えない。やがて、日が昇るにつれて霧がはれ、やつと梢の先に社殿がはつきりと見え始めてくる。先ほどまで、多くの修行者が集まっていた社殿の辺も、日の暮れと共に人影は失せ果て、もうもうと焚かれていた護摩や香煙は、三つの峰に分かれてゆき、雲となって漂っているように見える。